（様式２－２）

Ⅰ　学校の概要

主体的に学習に取り組む態度の育成モデル校事業　**高松市立山田中学校**

◆生徒数及び教員数

〇生徒数

第１学年	第２学年	第３学年	特別支援	全　校
５学級 １６７名	５学級 １７９名	５学級 １８５名	５学級 １８名	２０学級 ５４９名

〇教員数　　４０名

◆学校の特色

本校の「あいさつ運動」期間には、早朝から生徒の元気な「おはようございます」の言葉が校門に響き、非常に活気ある雰囲気で、学校生活が始まる。生徒会主催で計画・参加者募集し、自主参加が基本で行われるが、毎回校門付近に長い列ができるほど多数の生徒が参加し、学校を挙げての取組になっている。「あいさつ・うたごえ・ボランティア」が本校のスローガンで、生徒は行事やボランティア活動に一生懸命取り組み、明るく前向きに学校生活をよくしていこうという姿勢が見られる。本校の生徒は素直で、他の人の意見を聞き、指示されたことに対して真面目に取り組む生徒が多い。また、温和で、人当たりがよく、困っている友達を助けることができ、授業中も協力して活動する場面を目にする。

反面、物事に対して受け身で、自分で考えて行動することが苦手な生徒が見られる。課題に対してじっくりと考えずあきらめたり、自分の考えをうまく伝えられなかったりすることもある。加えて、ほぼ半数の生徒が１日当たり２時間以上、テレビゲームやスマートフォンを使用しているという実態があり、表現力や自己管理能力に課題があると思われる。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする生徒の育成

―なかまとともに「主体的に学び、考え、表現する」授業の工夫―

◆研究主題設定の理由

本校では、特別の教科「道徳」への取組が計画的で、行事等との関連も図られている。担任以外の教員が指導を行う授業も学期に一度計画されており、チームで道徳の授業の工夫が行われ、生徒も話合い活動等に意欲的に取り組んでいる。そこで養われた道徳性を生かし、課題である表現力や自己管理能力を高めつつ、生涯学習を視野に入れた学びに向かう力を身につけさせたいと考えた。

そこで、本校が推進してきた道徳（人権・同和教育）を基盤に、教育活動の様々な場面で、知識を一方的に教え込んだり、個々に学んだりするだけでなく、生徒がともに思いや考えを伝え合う活動の中で、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決しようとする場を設定する。そのことにより、ともに学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする態度を育てるとともに、基本的な生活習慣、自尊感情、達成感、挑戦、学校生活、規範意識、家庭学習、学習習慣に関わる諸問題についても改善を図りたいと考え、上記研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

(1) 魅力ある学習課題の設定

・ 生活に結びついた、生徒の問題意識に沿う課題の設定

・ 自己選択や自己決定ができる多様な考えが見つけられる課題設定

(2) 学習課題を共有し、対話しながら学習を深める場の工夫

・ グループやペア学習など学習形態の工夫

・ ICT 機器の活用

(3) 振り返りと評価の工夫

・ 自らの学びを実感する場の設定（自己評価）

・ 他者のよさを発見するとともに、称賛する場の設定（他者評価）

(4) 教科横断的な研究組織作り

授業づくり部会	なかまづくり部会	調査研究部会
〈各教科〉 なかまとともに「主体的に学び、考え、表現する」授業を工夫・実践・評価する。	〈特別の教科「道徳」〉 生徒が道徳的価値について主体的に考え、議論できるような学習を工夫・改善する。 〈特別活動〉 各教科・道徳科・総合的な学習の時間などの指導との関連を図り、学校行事などの自主的、実践的な活動に取り組み、キャリアパスポートを用いて学期ごとの振り返りを行う。 〈総合的な学習の時間〉 グループの力や感情理解、社会性の育成のトレーニングや、問題解決能力、対立解消スキルを身に付けるためのトレーニングを行ったり、実際に友人をサポートする経験を行ったりする。	アンケートの計画・実施・分析を行う。

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1　（生徒質問紙）　友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。

指標　　「①している」の合計

6月調査	→	目標値	→	11月調査
55.8%		60.0%		62.5%

指標の達成に向けた実践

(1) 対話しながら学習を深める場の工夫と「なかまづくり部会」の社会性育成トレーニングの工夫

２学期に行われた研究授業では、多くの教科が対話的な学習の場を取り入れ、話し合いながら学習内容を整理したり、問いに対する意見をまとめたりした。(**写真Ⅰ**) 社会科の「効率と公正の考え方をふまえて、みんなが納得のいく役割分担を考えよう」の授業では、メダカの飼育を学級で行う場合を取り上げ、意見交換を行った。そのなかで、生徒は問題点を指摘したり、共通点・相違点について話し合ったりして、よりよい方法を見出そうとしていた。その活動により、「国を動かすのは大変だ」「必ずみんなの意見が通るわけでない」など、一般化、概念化した考えに至っている生徒がおり、学びの深まりが見られた。

写真Ⅰ：「効率と公正の考え方をふまえて、みんなが納得のいく役割分担を考えよう」（社会）

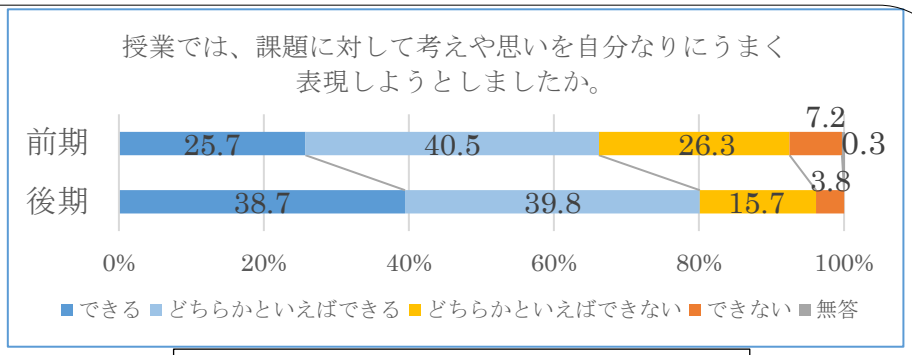
また、ピア・サポート学習を体系的に行い、グループで活動する良さを感じたり、コミュニケーション、感情理解などを高めたりする活動を定期的に行った。一方通行と双方向のコミュニケーションでは、相手の反応がない状態だと話し手に不安が残るが、(**写真Ⅱ**) 相手の顔を見て質問したり、返事を返したりしながらの双方向のコミュニケーションでは、安心して話ができることを実感した。(**写真Ⅲ**) 聞き手が反応する大切さを感じる授業となった。

写真Ⅱ：「一方通行のコミュニケーション」

写真Ⅲ：「双方向のコミュニケーション」

11 月の生徒調査では、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができていますか。」という問いに対して、「できている」と答えた生徒が 6.7 ポイント増加し、生徒のコミュニケーション能力の向上が確認できる。

また、「授業では、課題に対して考えや思いを自分なりにうまく表現しようとしましたか。」という問いに、肯定的に答えた生徒が 12.3 ポイント増加し、伝えようとする意欲も高まってきていることが分かる。（図Ⅰ）



図Ⅰ：生徒調査（前期６月、後期 11 月）

以上のような取組を行った結果、対話することの大切さを理解し、話合いに積極的に参加する生徒が増加したと考えられる。さらに、自分の考えと友達の考えを比較して、自分の考えを明確にしたり、広げ深めたりする活動にもつながっていた。

２　（生徒質問紙）　授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

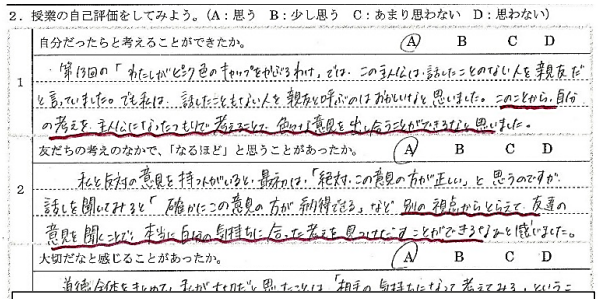
指標　　「①思う＋②どちらかといえば思う」の合計

6 月調査	目標値	11 月調査
82.9%	80.0%	88.1%

指標の達成に向けた実践

(1) 自らの学びを実感する振り返りの工夫

生徒が自らの学びを実感し、調整して新たな課題を見つけることを目的に、各教科で振り返りを行った。道徳では振り返りシート（図Ⅱ）を活用し、ただ感想を書かせるだけでなく、視点を絞って振り返りを行うことで、生徒の考えの変容が分かる工夫を行った。


2．授業の自己評価をしてみよう。（A：思う　B：少し思う　C：あまり思わない　D：思わない）

自分だったらと考えることができたか。　A　B　C　D

1　第1回の「わたしがピンク色のキャップをかぶる和は、とは、この子供は、話したことのない人を親友だと言っていた。でも私は、話したこともない人を親友と呼ぶのはおかしいなと思いました。このことから、自分の考えを、主人公になったつもりで考えました。他の意見を出し合うことができたなと思いました。

友だちの考えのなかで、「なるほど」と思うことがあったか。　A　B　C　D

2　私と反対の意見を持つ人がいると、最初は、「絶対、この意見の方が正しい」と思うのですが、話しを聞いてみると「確かにこの意見の方が納得できる」など、別の視点からとらえて友達の意見を聞くことで、本当に自分の倫理観に合った考えを見つけることができるなぁ」と感じました。

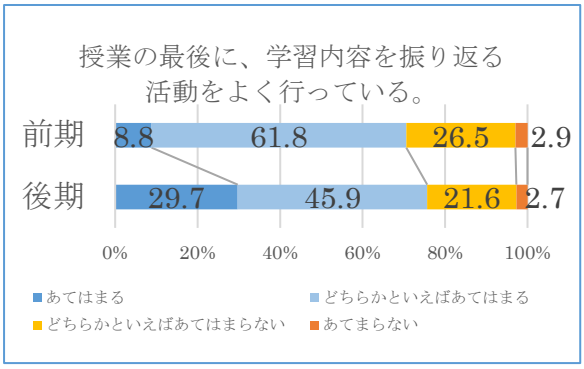
大切だなと感じることがあったか。　A　B　C　D

道徳合科をまじめて、私がそれだけ思ったことは「相手の気持ちになって考えてみる」ということ

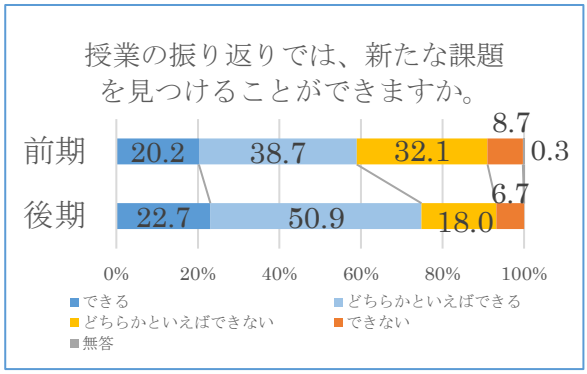
図Ⅱ：道徳振り返りシート（一部）

図Ⅲの教員調査では、「振り返る活動をよく行っている」という問いに、「あてはまる」と答えた教員が約 20 ポイント増加しており、意識的に振り返りを行うようになったことが分かる。

その結果、生徒は振り返りを通して、新たな課題を見つけることができるようになってきており、（図Ⅳ）次の学びに向かう姿勢が整いつつあると言える。



図Ⅲ：教員調査（前期７月、後期 12 月）



図Ⅳ：生徒調査（前期６月、後期 11 月）

３　（生徒質問紙）　授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。

指標　　「①取り組んでいる＋②どちらかといえば取り組んでいる」の合計

６月調査	→	目標値	→	11 月調査
64.7%		**80.0%**		**86.6%**

指標の達成に向けた実践

(1) 問題解決的な学習の工夫

学習のまとまりの中で、生徒が課題を立て、解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動を各教科で実践してきた。数学の授業では、関数を用いて自動車を選択する授業（**写真Ⅳ、Ⅴ**）が行われ、生徒は本体価格だけでなく、使用年数と燃費の関係を考えながら、様々な視点から自動車を選択しようとしていた。生活に結びついた、生徒の問題意識に沿う課題設定の工夫が見られ、生徒は興味をもって粘り強く課題解決に取り組んだ。

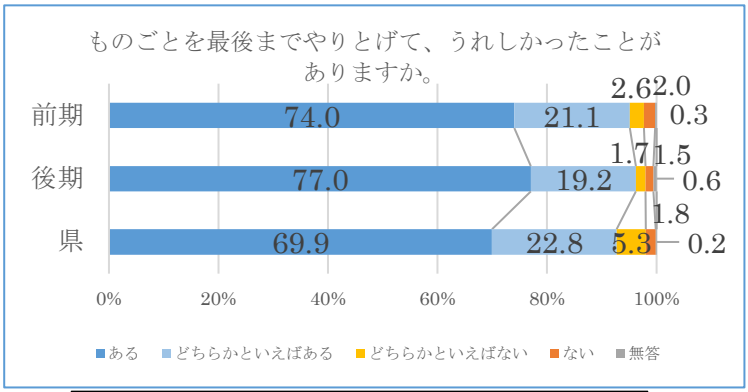
写真Ⅳ：関数のグラフを用いて課題解決の情報を提示（数学）

また、技術・家庭科の授業では、「自分で考えた献立をよりよくしよう」という課題設定のもと、生徒は栄養面の改善に向けて、料理や食品を変更したり、付け加えたりしながら、献立をよりよくしようと考え工夫した。生徒によって工夫の方法は様々だったため、学習の最後には、改善点を共有する場を設定し、友達の工夫を聞いて、自分の献立改善に生かすことができた。改善点の発表には、電子黒板を使用して、視覚的に伝えることができたため、内容の理解も早く、有効な活動となった（**写真Ⅵ**）。

写真Ⅴ：話し合いながら、選択する自動車を検討（数学）

各教科で、主体的に取り組む課題設定を工夫して問題解決的な学習の場を設定したことで、行事の少なかった本年度の学校生活の中でも、「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある」と答えた生徒の割合が増加しており（**図Ⅴ**）、生徒の充実感につながったのではないかと考えられる。

写真Ⅵ：献立の画像に改善点を書き込み、発表に活用（技術・家庭科）



図Ⅴ：生徒調査（前期６月、後期 11 月）

◆特徴的な取組

1 対話的な学習を深める工夫

音楽の「曲の構成に注目して、音楽のまとまりを理解し、曲想の変化を味わおう」という題材の授業では、グループの中で共有、振り返り、新たなことに気づくために、グループごとに音源を用意し、音楽を通したコミュニケーションを積極的に図る工夫がなされた（**写真Ⅶ**）。また、美術の「『神奈川沖浪裏』で北斎は何を伝えようとしたのか考えよう」という授業では、絵の中で富士山、波、人が発している声や音を想像する場面において、ふせん紙や吹き出しを用いて絵に貼り付ける場が設けられた（**写真Ⅷ**）。

写真Ⅶ：１つの音源をイヤホンを用いてグループで鑑賞している様子（音楽）

上記のような工夫により、生徒がじっくり考えたり、アイデアを表現しやすかったりしたことで、グループごとの話合いが活発になり、生徒の見方や考え方が広がっていた。

写真Ⅷ：ふせん紙を用いて自分の感じた音を説明している様子（美術）

2 ＩＣＴの活用

保健体育の授業では「チーム全員で協力しながら自分の役割を果たし、ネット際の攻防を楽しんでゲームをしよう」という学習課題を設定し、その解決に向けて、タブレット端末を利用した（**写真Ⅸ**）。バレーボールのゲームの中で、タブレット端末を利用して試合の様子を撮影し、動画を見ながらゲーム分析を行い、チームの課題の発見や解決を図るという学習内容で、動画を見ることで生徒同士のアドバイスが的確なものとなった。タブレットを利用してその場面を再現することで、空間認識ができるようになり、話し合ったことが後のゲームで生かされ、積極的に活動に参加する生徒が増加した。

写真Ⅸ：タブレット端末を利用してチームでゲーム分析している様子（保健体育）

技術・家庭科では、「日常着の手入れについて考え工夫しよう」という学習課題で、既習事項を活用し、日常着の手入れに関する問題を見いだし、課題を設定し、家庭実践を基に課題解決するという問題解決的な学習を行った。生徒各自が実践内容や考察したことを「SKY MENU」発表ノート使用してプレゼンテーション資料を作成し発表を行った（**写真Ⅹ**）。家庭実践と考察についてレポートを作成していたことと、プレゼンテーションのひな形を用意していたため、プレゼンテーション資料の作成は比較的容易にできた。生徒は実践前と実践後の画像を比較したり、教科書やノートの資料を取り込んだりして、見る人にわかりやすい工夫を行った。ワークショップ型の小グループでの発表は、質問もしやすく、内容も伝わりやすかったため、自分の生活に生かせる手入れのこつを見つける生徒が多く見られた。

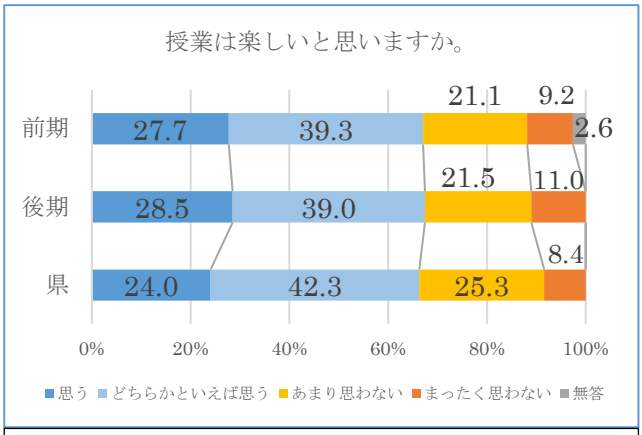
写真Ⅹ：日常着の手入れについて実践したことをプレゼンテーションしている様子（技術・家庭）

Ⅳ　研究の成果と課題

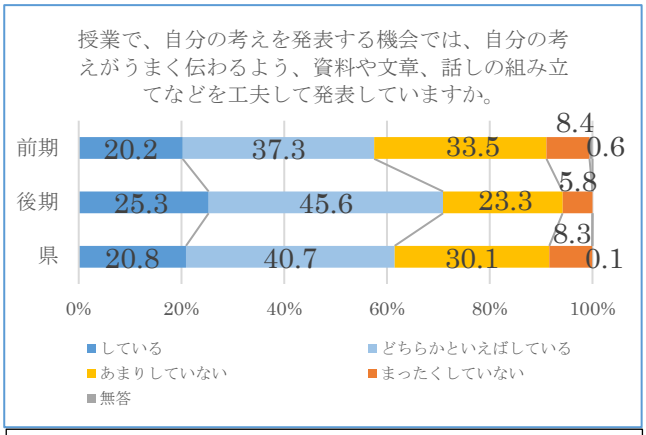
◆研究の成果

授業改善を行ってきたことで、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決しようとする態度が育ってきたと考えられる。加えて、生徒がお互いに支えあう活動を行ってきたことで、ともに学ぶ喜びを感じ（**図Ⅵ**）、**図Ⅳ**では、新たな課題を見つける生徒が増加していることから、自ら学び続けようとする態度にもつながってきている。

また、課題とする表現力についても、対話的な学びを充実させたことにより、向上してきている。（**図Ⅶ**）今後も同様の取組を続け、生徒の学びに向かう力を身に付けさせたい。



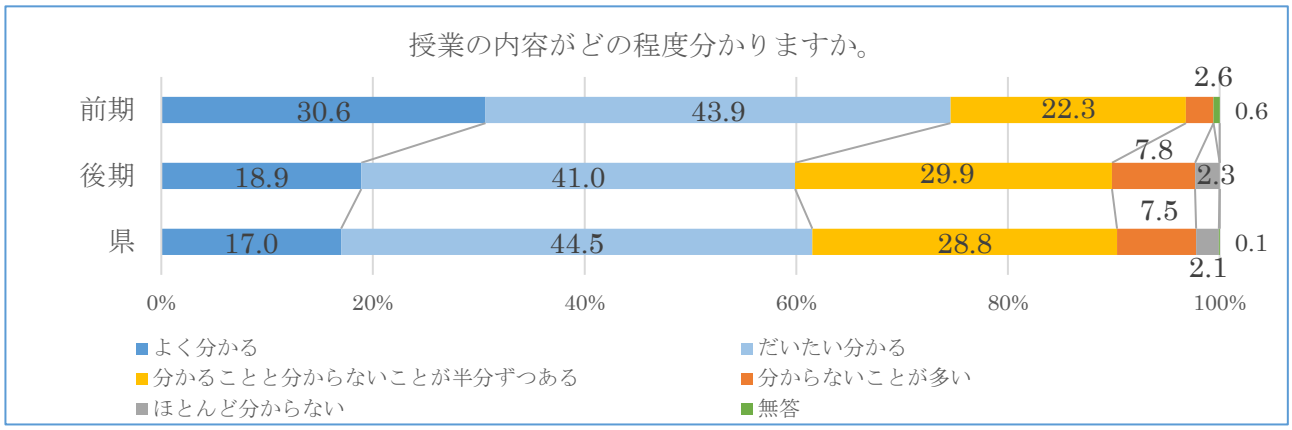
図Ⅵ：生徒調査（前期６月、後期 11 月、県平均:香川県学習状況調査）



図Ⅶ：生徒調査（前期６月、後期 11 月、県平均:香川県学習状況調査）

◆ 今後の課題

「授業の内容がどの程度分かりますか」という問いに対して、半分以上分からない生徒の割合が増加している（**図Ⅷ**）。学習が進むにつれて、内容の難易度は増すが、生徒が授業の内容を知識･理解だけと捉えていることが原因とも考えられる。そこで、教員の指導のねらいが生徒にも伝わり、生徒自身も自らの学びを正当に評価することのできる「指導と評価の一体化」を進めることが重要であると言える。振り返りを行う場の設定は増加しているので、（**図Ⅲ、指標２参照**）今後は、振り返り項目を精査し、生徒にも自らの学びの成長がわかる振り返りの方法を工夫していきたい。



図Ⅷ：生徒調査（前期６月、後期 11 月、県平均:香川県学習状況調査）

学力向上モデル校（主体的に学習に取り組む態度の育成モデル校）　高松市立山田中学校

1　研究主題

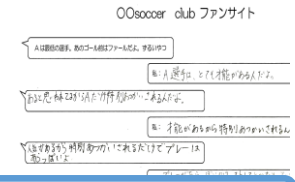
学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする生徒の育成
―なかまとともに「主体的に学び、考え、表現する」授業の工夫―

2　研究の具体

学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする生徒の育成

対話を深めるなかまづくり

①　考え議論する「道徳」の実践



筆談でロールプレイング

②　ピア・サポート活動の実践

③　授業の中でのなかまづくり（認め合い）

発表の後に拍手が

相互関連

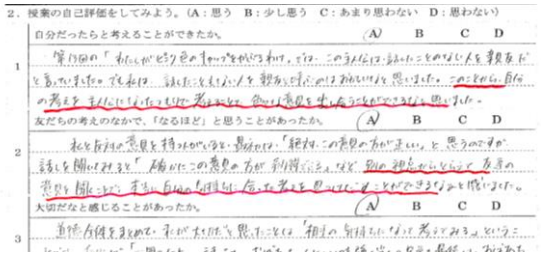
「主体的に学び、考え、表現する」授業づくり

①　生徒が主体的に取り組める問題解決的な授業づくり

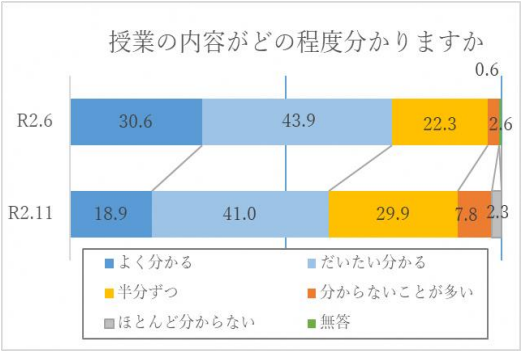
②　自らの考えの変容を実感できる学習指導過程の工夫

友達の助言から

③　自らの学び方の成長を確認することができる振り返り活動の工夫



3　研究の検証及び改善の手立て

授業改善を行ってきたことで、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決しようとする態度が育ってきたと考えられる。加えて、生徒がお互いに支え合う活動を行ってきたことで、ともに学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする態度にもつながっている。

「授業の内容がどの程度分かりますか」という問いに対して、半分以上分からない生徒の割合が増加している。そこで、教師の指導のねらいが生徒にも伝わり、生徒自身も自らの学びを正当に評価することのできる「指導と評価の一体化」を進めることが重要であると言える。今後は、振り返り項目を精査し、生徒にも自らの学びの成長が分かる振り返りの方法を工夫していきたい。